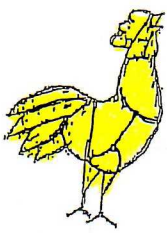


# 鶏けいめい鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)



## イエスの言葉

『家を建てる者の捨てた石、  
これが隅の親石となった』

聖書(マタイ福音書21章42節)

牧師 河合裕志

ある時イエスは「ぶどう園と農夫」のたとえを話した。周りには大勢の群衆が興味深そうに耳を傾けている。

アラスジはこう～ある家の主人がぶどう園を作った。これを農夫達に貸した。収穫時に収穫を受け取るため僕(しもべ)達を送った。だが農夫達は彼らに対して袋だたきにしたり、石で打ち殺したりした。そこで主人はまた他の僕達を送ったが農夫達は同じ目にあわせた。そこで最後に「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」と言って主人は息子を送った。ところが農夫達は息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出し殺してしまった～

これは何を語ったもの? 次のように推測できそう。主人=神、ぶどう園=イスラエル、農夫達=イスラエルの人々・指導者、僕達=預言者、息子=イエス。

確かにイスラエルの歩みを見るとこういふことが言えそう。旧約聖書を見るとイザヤとかエレミヤとか沢山の預言者が神のもとからイスラエルの民に遣わされる。神の言葉を告げ神に従うように訴えるけれど民はなかなかウンと言わない。逆に預言者に迫害を加えたり殺害したりした。この情景をイエスは語ってる。

それは群衆にもよくわかった。わかんない

いのは「息子」のこと。これはイエスだけが知っている。イエスはこの息子を自分とした。それは死を確信していたということ。尋常でない死を。そして同時にイエスは自分の復活を見通してた。それが冒頭の言葉。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった』。

これは実はイエスの言葉ではない。詩編118編22節の言葉。イエスはかねて詩編を愛読。そしてこの一節を自分にあてはめた～自分は捨てられた石だ、不要な者として人々によって十字架につけられ抹殺される。でもそれで終わらない。その石が隅の親石となって建物全体を支えるものとなる。私は死からよみがえって教会を支える土台石となる～果して歴史はこのイエスの観測の通りに進んで行ったのでは?

この言葉、いろんな面に応用できそう。人々によって捨てられ、無視され、邪魔者扱いにされてもそれでくさっちゃいけないよ。逆転ということがある。思わぬ突破口が開けるかも。なくてはならない人として登用されるということも。一隅を照らすことができればそれだけで結構なこと。とに角人生捨てちゃいけないんだ。必らずいいことあるから。

### 集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

求道者会：日曜日午前9時40分

中高青年会：日曜日礼拝後

お話し会、卓球：水曜日午後1時～7時

お祈り会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時